

複合名詞の構文アプローチに関する理論的考察

ちか たいし
近 大志

京都大学大学院

nanou7614@gmail.com

概要: [名詞＋名詞] から成る複合名詞は構成要素の意味のみには還元できない意味を含む (e.g. rice wine ‘wine *made from* rice’; sneaker war ‘*commercial competition over* sneaker’). 非構成的な意味を適切に解釈するうえで、伝統的には文脈の役割が強調されてきたが (Downing 1977, Jespersen 1942)、近年では特定のパターンに対する頻度情報の重要性も指摘されている (Hamlitsch 2020, Levin et al. 2019, Zlatev et al. 2010)。複合名詞の妥当な意味記述の枠組みを探ることを目的として、本稿は使用基盤モデルや構文形態論に依拠する構文アプローチ (Booij 2010, Langacker 2008, Ryder 1994) を批判的に検討する。そして、構文アプローチは粒度の高い記述と解釈の予測性をもたらす点で他の理論 (e.g. Levi 1978, Warren 1978) よりも優れている反面、構文スキーマにおける (i) 意味の記載内容 (ii) 階層的知識の2点において検討課題が残ることを主張し、(i-ii) について考察する。

キーワード: 複合名詞 (Noun+Noun)、構文スキーマ、構文ネットワーク、自律・依存概念の配置

1 はじめに

複合名詞 (Noun+Noun; Nominal Compounds) は英語や日本語といった多くの言語で生産的に用いられる語形成パターンである。[名詞＋名詞] という最小の組み合わせによって世界の複雑な事物を命名するために用いられることから、構成要素の脱文脈的意味のみには還元できないような豊かな意味を持つ¹。

- (1) a. apple juice ‘a juice **made from** apple’
- b. rat sneak ‘a sneak **preying** rats’
- c. bean garden ‘a garden **filled by** beans’

¹ 議論を単純にするため、本稿では主な考察対象を [名詞＋名詞] 型の一次複合語に限定する。語根 (root) ではなく動詞派生名詞 (deverbal noun) が主要部に生起する二次複合語 (e.g. army investigation, city employee) についての総説は Bauer et al. (2015) や影山 (1999) を参照されたい。

d. sneaker war ‘a commercial competition for sneaker’

例えば、(1a-b)の解釈には「～から作られる」や「～を捕食する」といった名詞間の意味関係を把握する必要がある。他にも、(1c-d)の理解には「～で一杯の」「商業的な競争」といった構成要素に関する意味特徴の把握が欠かせない。だが、[名詞+名詞]型の複合名詞は上に挙げた解釈を言語的に指定するわけではなく、原理的には他の解釈も文脈によっては認可されうる。そのため、非構成的な意味を適切に解釈するうえでコンテキストの役割が強調されてきた。

Compounds express a relation between two objects or notions, but say nothing of the way in which the relation is to be understood. **That must be inferred from the context or otherwise.**

(Jespersen 1942: 137; 強調は筆者による)

一次複合語の中で名詞+名詞型を簡単に見ておこう。この型は2つの名詞が並んでいるだけであるから、両者の意味関係は多分に語用論的な要因に左右され、その内部の意味関係を厳密に整理・分類するのは困難である。

(影山 1997: 76; 強調は筆者による)

だが、近年では特定のパターンに対する頻度情報の重要性も心理実験やコーパス調査の観点から指摘されており、複合名詞の使用にとって欠かせない要因の一つと考えられている (e.g. Hamlitsch 2020, Levin et al. 2019, Zlatev et al. 2010)。例えば、[X+タイム]というパターンの事例 (e.g. コーヒータイム、おやつタイム) は単なる「Xに関する期間」を表すのではなく、概して「Xが関与する楽しい活動の時間」として解釈される傾向にある (Hamlitsch 2020)。そのため、複合名詞に関する言語知識を記述する理論としては、非構成的な意味を十分な粒度で記述できるだけでなく、特定のパターンに対して一定の予測を与えるようなものが望ましい。

本稿では、妥当な意味記述の枠組みを探ることを目的として、使用基盤モデルや構文形態論に依拠する構文アプローチ (Booij 2010, Langacker 2008, Ryder 1994) を批判的に検討する。このアプローチの想定では、複合名詞の使用に関与する言語知識は事例間に共通する特徴の抽出を通して構築される構文スキーマとして同定される。そして、構文スキーマを記述の単位として用いることによって高い記述の粒度と解釈の予測性をもたらす一方、構文的知識にまつわる (i) 意味内容および (ii) 階層的知識について検討課題が残ることを主張する。

議論の流れは次の通りである。2節では複合名詞の構文アプローチを紹介し、この枠組みが複合名詞にまつわる理論的問題に対してどのような貢献を果たし、ま

た、現状どのような検討課題があるのかを指摘する。3節では複合名詞の生産的な解釈タイプ(関係タイプ・属性タイプ)について検討し、両者を認知文法における自律・依存概念の配置法(A/D-alignment)の観点から区別する。4節では複合名詞の構文の階層的知識について検討し、意味・形式に関して中間的な抽象度を有する2つの構文スキーマ(属性修飾構文・関係明示構文)を提案し、構文ネットワークの全体像を提示する。5節は結論であり、併せて今後の課題についても述べる。

2 複合名詞の構文アプローチ

本稿では、使用基盤モデル(Langacker 1987, 2008; Ryder 1994)または構文形態論(Booij 2010)といった理論に依拠した記述の枠組みを指して、これを**構文アプローチ**と称する。2.1節ではこの枠組みの概要を示す。2.2節では複合名詞の理論的問題に対する構文アプローチの解決策を挙げ、他理論に対する優位点を示す。2.3節では2つの検討課題を提示する。

2.1 構文アプローチの概要

構文アプローチは以下の想定に立つ。

- (2) a. 言語記述の単位として構文スキーマ(constructional schema)を積極的に用いる
- b. 複合操作を構文スキーマの具現化(instantiation)とみなす
- c. 構文的知識の総体は階層的(hierarchical)に構成される

本節では、構文アプローチの理論的基盤となる使用基盤モデル(Usage-Based Model)と構文形態論(Constructional Morphology)の概要を示すことによって(2a-c)の内実を明らかにする。

使用基盤モデルとは認知言語学、特に認知文法(Langacker 1987, 2008)における言語観を指す。このモデルでは、言語知識を生得的に与えられた知識としてではなく具体的な言語使用から後天的に規則が学習されるという想定に立つ。本稿で重要となるのは、事例間の形式・意味的な共通性を抽出することによって構成される記号ユニットの統辞的關係(syntagmatic relation)を捉えた構文スキーマ(constructional schema)を言語知識として積極的に記述する点にある。

次に、構文形態論では語の複合(compounding)や接辞付加(affixation)といった形態論の諸操作は構文スキーマの具現化(instantiation)として捉えられる(Booij 2010)。構文形態論の強みの一つは、従来の枠組みでは例外として扱われてきたような、

意味や形態統語論的側面で変則的にふるまう事例を適切に記述できる点にある。意味に関して、例えば Booij (2010) はオランダ語において「巨人」を意味する名詞 *reuze* が [reuze + 形容詞] という環境に生起するとき、‘very’ という意味として解釈される (e.g. *reuze-leuk* → ‘very nice’) ことを指摘している。特定の構文環境のみに生起するような語の意味は「拘束的意味 (bound meaning)」として扱われ、[reuze+形容詞] のように一つ以上の要素を変項とするような構文スキーマを指して構文イディオム (constructional idioms) と呼ばれる。

また、構文アプローチにおいては、特定の構文的知識が他の知識から独立して心内に表示されるという見方を取らず、構文同士の関連性から構成されるネットワーク状の知識構造に埋め込まれた形で示される。構文間の関係の一つには継承関係 (inheritance relation) があり、記載内容の抽象度によって上下関係を持つ構文スキーマは一方の特徴がもう一方のスキーマに受け継がれる。このように、構文アプローチでは構文的知識の総体を階層的な知識構造として捉える。

2.2 構文アプローチの利点

前節に紹介した構文アプローチに基づくと、複合名詞の言語知識は構文スキーマから記述され、その使用はスキーマの実現ないしはカテゴリ化 (categorization) の観点から説明される。だが、これは単に理論的な前提から演繹的に導かれた帰結に過ぎず、他の理論ではなくこの枠組みを採用するための積極的な動機を与えるわけではない。そのため、複合名詞の解釈にまつわる理論的問題を数点示し、他のアプローチと比較して構文アプローチがどのような点で優位点を持つのかを明らかにしておく。

複合名詞の意味に関する問題として、ここでは以下のものを検討する。

- (3) a. 記述の精度と粒度
- b. 生産的な外心複合語の扱い

2.2.1 利点 1: 記述の精度と粒度

まず、(3a) は (1) に例示したような非構成的意味の記述・説明に関する問題である。構文アプローチに立つ Ryder (1994) では従来の説明法として、従来の記述的な枠組み (e.g. Adams 1973, Warren 1978) と生成規則を用いて意味関係の範囲を限定する立場 (e.g. Levi 1978) を紹介している。

前者は事例毎の意味を素朴に記述し、それを可能な意味パターンとして定式化するアプローチを指す。例えば、Adams は ‘ N_2 which is the means of preserving N_1 ’ とい

うパターンを考え、life-boat や safety belt といった事例が該当すると指摘している。

意味タイプの多寡は記述対象の範囲の違いによる部分が大きいため、一概に研究の優劣は付け難いが、意味関係の同定が恣意的になってしまう点がそもそもの問題点として挙げられる。また、Ryder (1994) によれば、このアプローチでは概して単なる意味関係の指摘に留まってしまうため、どのようなパターンがどのような解釈を取りやすいかといった根本的な問題に対して一貫した答えを用意できないという問題点も指摘できる。

後者の路線に立つ代表的な研究には Levi (1978) の削除・復元可能な述語 (Recoverable Deletable Predicates; RDP) を用いた説明が挙げられる。Levi は有限個からなる抽象的な述語のリスト²を定め、いずれかの述語と項から成る節相当の構造を深層構造に基底生成し、述語の削除 (+ 語順の変形) を適用することで複合名詞が生成されると説明している (e.g. book have picture → book ~~have~~ picture → picture book)。

第一に、このアプローチは少数の述語群によって多様な意味関係の統一な説明を試みたものであったため、RDP の意味は抽象的にならざるを得ない。また、この枠組みが扱う非構成的意味は意味関係に限られるため、(1c-d) にみられる構成要素の詳細な特徴を記述することができない。そして、Levi 自身も認めるように、RDP の指定からは説明できない意味関係が容易に設定できるため、アプリアリに意味解釈の範囲を限定するアプローチは記述の被覆率に関して問題がある (cf. Downing 1977)。

前節で示したように、構文アプローチは複合名詞に関する言語知識を事例間に共通する特徴の抽出を通して構築される構文スキーマとして同定する。例えば、Ryder (1994) は構文スキーマを用いた複合名詞の意味記述を行い、その予測についてオフライン実験を実施している。例えば、[X+man] というパターンに該当する事例 (fireman, milk man, ...) は単に「X に関係する人」を表すのではなく、「X に関連する活動に従事する人」として解釈される傾向が強いことを検証した。このように、意味関係をトップダウン的に定めるのではなく、構文スキーマ単位で意味を記述することによって記述の粒度が確保でき、個別事例に対しても一定の予測力が担保できる。

² RDP として、Levi (1978) は cause, have, make, use, be, in, for, from, about の 9 つを提案した。そのうち、最初の 3 つに関して項構造の交替が可能である点を踏まえ、合計で 12 個の意味関係が適用されるとしている。

2.2.2 利点 2: 生産的な「外心」複合語

次に、(3 c)の問題についてである Benczes (2006)によれば、全体の意味が「(字義的な)N₂の一種」と解釈される内心複合語 (endocentric compounds)の考察が複合語研究で中心的な役割を演じてきた一方で、外心複合語 (exocentric compounds)は多分に例外事例とみなされてきた³。だが、Benczesは外心複合語と扱われるような比喩的な複合語 (figurative compounds)であっても一種の体系性を持つ事例が存在するため、これらを構文スキーマの観点から捉え直すことを主張している。

[If] the constituents of the compounds themselves are selected so as to follow normal, everyday patterns of English compounding, then we are left with the idea that metaphorical and/or metonymical compounds are not exceptional: they are also **based upon productive patterns.**

(Benczes 2006: 4-5 強調は筆者による)

このように、従来の意味で外心複合語とみなされる複合名詞であっても、その使用に生産的な構文的知識が関与しているのであれば、その体系性を記述できることが望ましい。

以上、構文アプローチでは構文スキーマを記述の単位として用いることによって非構成的な意味の記述が可能となり、加えて、従来外心複合語とみなされ議論の俎上に上らなかった事例についても扱えるようになるという利点を確認した。

2.3 構文アプローチの課題

前節では非構成的な意味および生産性の観点から構文アプローチの利点を挙げたが、現段階では以下の検討課題が残っているように思われる。

- (4) a. 構文的知識の意味内容
- b. 階層的な構文的知識のあり方

以降、(4a-b)を順に概観する。

³ 外心複合語を考察対象外とする姿勢は構文アプローチの研究にもみられる。例えば、Ryder (1994)では構文スキーマの記述を内心複合語に限定しており、後項が比喩的に解釈されるような事例についての検討を避けている。

2.3.1 課題 1: 構文的知識に記載される百科事典的知識

まず、一点目についてである。Langacker (2008) では、複合名詞一般に適用される構文スキーマの概念図式を図1のように表示している。

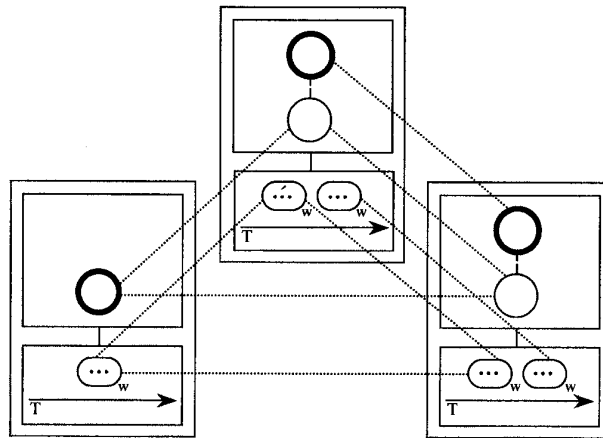


図1 認知文法における複合名詞の構文スキーマ (Langacker 2008: 169)

上図において、左右・上部にあるボックスは意味極と形式極から成る記号構造をそれぞれ表している。意味極における太線の丸は名詞がプロファイルする要素を指す。右部に位置する記号 (N_2) は単にモノ (thing) を表すだけでなく、抽象的な要素 (関係概念・モノ概念) が実線と丸で示されている。そして、点線は記号の統合・合成に関わる対応関係を示したものであり、最終的な合成構造が上部に表示される。

例として、Langacker はこの概念図式を用いて jarlid (瓶のふた) の合成構造を図2のように記述している。主要部 lid のベースとして示される「容器」が jar のプロファイルと対応づけられた結果、「ふた」と「容器」の位置関係が示されている⁴。

だが、複合名詞の理解に必要な全体構造は jar lid にある静的な幾何学的構造には限定されない。例えば、[X+risk] の事例 (e.g. health risk, fire risk) を把握するには「危害フレーム (risk frame)」をベースとして想起し、 N_1 に生起する名詞が当該フレームにおいてどのような役割として参与するのかを考える必要がある (cf.

⁴ 3語以上から成る複合名詞においては、先に合成された [名詞+名詞] と1つの名詞を再帰的に合成することによって形成される。その例として、Langacker (2008: 166-167) は jarlid factory を挙げ、[jar+lid] と factory の合成構造を図示している。

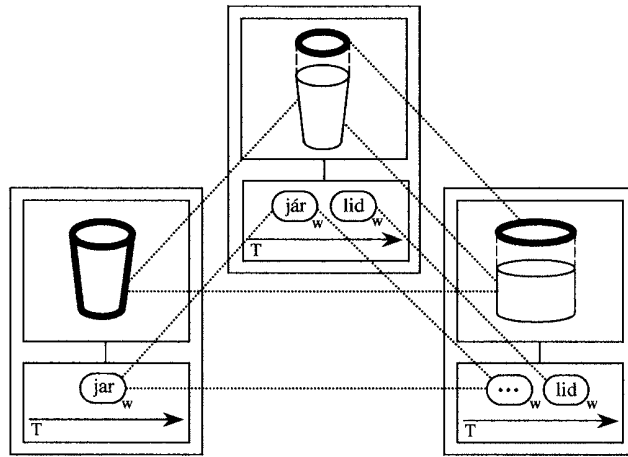


図2 複合名詞 jarlid の合成構造 (Langacker 2008: 164)

Fillmore and Baker 2015)。Ryder (1994) では理解に関わる百科事典的知識について事象スキーマ・個体スキーマ・特徴スキーマという3つの分類を与えているものの、それらの内実について詳細な検討が与えられているとは言えない。そのため、意味フレーム・スクリプトといった、動的な事象構造にまつわる百科事典的知識がどのように図1のような認知図式に表示され、構文スキーマの意味内容として記載されるのかを考慮する必要があるだろう (cf. Bundgaard et al. 2006、近 2022)。

2.3.2 課題 2: 階層的な構文的知識の構成

次に二点目の課題である。何らかの形で構文アプローチを採用する研究が提示してきた構文スキーマは以下の2パターンに大別される。

- (5) a. 意味・形式の指定に関して最も抽象的な構文スキーマ
- b. 個別の構文イディオム

(5a) は $[N_1+N_2] \leftrightarrow 'N_2 \text{ having some relation } R \text{ to } N_1'$ のように表示される構文スキーマを指す⁵ このスキーマは N_1 と N_2 が何らかの関係のもとで把握されることを指

⁵ 構文スキーマの表記を統一するため、本稿ではカッコ [] 内に形式情報を記載し、シングルクォーテーション内に意味内容を記している。また、添字は異なる部門に属する要素間の対応関係を示す。なお、4節以降では強勢パタンの情報を新たに記載するため、カッコ [] 内に示される形式情報を統語部門と音韻部門に区別する。

定しているだけであり、複合名詞一般に共通する意味を特徴づけているに過ぎない。(5. b)は一方を変項とした構文スキーマ(e.g. $[N_1+man] \leftrightarrow$ ‘someone engaging in a certain activity’)を指し、生産的な個別パタンの記述に用いられる。

ここで疑問となるのは、階層的な構文ネットワークからみた(5a-b)の位置付けである。(b)の内容は(a)の指定を満たすものであるが、このことは前者が後者から「直接」継承されることを意味するのだろうか。それとも、抽象度に関して(a)と(b)の中間レベルを新たに設定すべきなのだろうか。だが、仮に前者の見方が正しいとした場合、臨時的な組み合わせや、通常生じにくい解釈が文脈の要請によって解釈されるケースを説明することが難しい。このような事例を解釈する場面において、既知の構文イデオムの貢献は少なく、また、 $[N_1+N_2]$ という抽象性が高い構文スキーマの指定のみからは概念化の指針を得ることもできないからである。

本節では構文アプローチを複合名詞の記述に用いることの利点を述べ、構文スキーマに記載される意味内容および階層的知識について検討課題が残っていることを指摘した。

3 複合名詞の概念化方略

複合名詞の解釈は多岐にわたるものの、生産的に用いられる意味タイプは属性タイプと関係タイプ2つに大別される。本節では構文スキーマと独立した議論として両タイプの区別の仕方を検討する。3.1節では複合名詞の一般的な議論から関係読みと属性用法の違いを概観する。3.2節では自律・依存概念の配置法(A/D-alignment)といった認知文法の道具立てを用い、両タイプの概念化の違いを説明する。

3.1 複合名詞の主要な意味タイプ

複合名詞の意味タイプにおける大分類として、属性タイプ・関係タイプ・並列タイプの3つがある(cf. Bauer et al. 2015, Lieber 2009)⁶。

- (6) a. 属性タイプ: bowleg, stone wall, steel bridge
 b. 関係タイプ: sleep pill, jar lid, tear gas
 c. 並列タイプ: student-athlete, prince consort

⁶ 統一的な術語があるわけではないが、伝統的には属性タイプに対応する複合名詞は attributive compound、関係タイプは argumental compound、そして並列タイプは coordinate compound と呼ばれている。

属性タイプは N_1 の顕在的な属性が N_2 を修飾するような事例を指す (e.g. bowleg ‘leg shaped like a bow’). 修飾に用いられる属性は色や大きさといった知覚的特徴もあれば、性格や習性といった特定の文化に依存する特徴もある。関係タイプとは、事象関係によって両要素が関係づけられるような事例を指し、典型的には N_2 が喚起する出来事が関係の形成に用いられる (e.g. sleep pill ‘pill helping one’s sleep’). そして、並列タイプは N_1 と N_2 の両方の性質を備えた事物を指示し、前者2つのパターンとは異なり、一方の構成要素を意味的な主要部として同定することができない。英語の複合語では並列タイプの生産性が低いことから、以降では属性タイプと関係タイプの対立に限定した議論を行う。

両タイプの区別として、先行研究では以下の基準が提案されてきた。

- (7) a. コピュラ文へのパラフレーズ可能性
- b. 概念化方略の違い
- c. 強勢位置の傾向

1つ目は、当該の複合名詞をコピュラ文に置換できるかどうかを基準とした区別である。属性タイプは ‘ N_2 is N_1 ’、もしくは比喩指標を伴う ‘ N_2 is like a N_1 ’ という文にパラフレーズできる一方、関係タイプをこれらの構文環境に置き換えると元の意味が失われる (Glucksberg 2001, Levi 1978)。例えば、bowleg は ‘the leg is like a bow’ とパラフレーズできるが、sleep pill を ‘the pill is (like) a sleep’ とは読み替えられない。このような観察を通して、Glucksberg (2001) や Levi (1978) では属性タイプにおける N_1 の役割と形容詞との類似性を指摘している。

2つ目は、認知心理学の観点から概念の合成 (concept combination) を研究する Wisniewski らの一連の研究 (Wisniewski and Gentner 1991, Wisniewski 1997) によって提案されている区別に基づく⁷。Wisniewski and Gentner (1991) では本稿の内容に関連する名詞概念の合成過程として (i) 特定スロットの役割をフィルターによって補充するプロセス (ii) 属性の値を一方の概念にマッピング (mapping) させるプロセスを提案しており、前者はスロット補充 (slot filling)、後者は属性マッピング (property mapping) と呼ばれる。

例えば、robin+snake という新規の組み合わせは「コマツグミを捕食するへび」や

⁷ もう一つの代表的な心理モデルとして、Christina Gagné が提唱する CARIN モデル (Competition Among Relations in Nominals) がある。概略このモデルは RDP 相当の意味関係と頻度情報の結びつきを重視したものであるため、Wisniewski らのモデルとは異なり、属性タイプと関係タイプの認知過程の違いを重要視していない。CARIN モデルに基づく心理実験や理論的仮定の変遷については Gagné and Spalding (2013) を参照されたい。

「コマツグミのように赤いヘビ」ように解釈が可能である (Wisniewski and Gentner 1991: 272)。前者においては、主要部が喚起する「捕食」というシナリオのスロットにあたる「捕食者」「獲物」をそれぞれ snake と robin が補充することによって解釈される。後者については、robin と snake に共通する「色」という属性 (property) について、robin がとる値 (value) の「赤」を snake へ転移させることで解釈が行われる。

3つ目は、強勢位置の傾向に基づく区別である。複合名詞においては、特に解釈タイプの違いを強調する目的で強勢位置を区別することが知られている。例えば、Cinque (1993: 281) では toy factory という組み合わせについて、強勢位置と解釈の仕方を次のように対応づけている⁸。

(8) toy factory

- a. 関係タイプ: *tóy factory* ‘a factory producing toys’
- b. 属性タイプ: *toy fáctory* ‘a factory which is a toy’

他にも、Giegerich (2004) では語彙化 (lexicalization) された事例の変異を踏まえつつも、steel bridge、stone wall といった属性タイプが後部強勢をとり、opera singer、tear gas などの関係タイプが前部強勢を取ることを指摘している。

これらの見解に基づけば、関係タイプが前部強勢を取り、後部強勢を属性タイプとして規定できる可能性がある。だが、関係タイプに属する kitchen table ‘table located in kitchen’ や apple pie ‘pie made of apple’ が後部強勢を取るなど、その反例は多く存在する。また、Bauer et al. (2015) や Plag et al. (2008) では書記法や N₂ の統語的側面といった意味タイプ以外の要因が強勢分布に影響を及ぼす可能性を検討している。そのため、以降の議論では意味タイプの違いがアクセントパタンの区別を生むという前提に立つが、現時点では音韻論による区別は絶対的な基準を提供するというよりも、あくまでも両タイプの典型特徴を捉えたものと考えることが妥当である。

3.2 依存/自律概念の配置法による区別

認知文法における記号の合成は概念間の対応関係 (correspondence) によって記述される。多くの場合、一方の要素が抽象的に示すスロットについて他方の要素

⁸ Cinque (1993) では統語論の枠組みから複合名詞の統語構造を与え、N₁ が補部 (complement) として生起するものが本稿でいう関係タイプ、N₁ が付加詞 (adjunct) に位置するものが属性タイプに相当することを主張している。

が精緻化 (elaboration) することによって合成構造が構築され、他要素によって精緻化されるような概念要素を指して精緻化サイト (elaboration site) と呼ばれる。そのため、精緻化サイトを含む概念は他の概念との対応関係を必要とする点で概念的に依存しており (conceptually dependent)、精緻化を行う概念は概念的に自律している (conceptually autonomous)。

名詞はモノ (thing) をプロファイルし、典型的には自律概念として機能する一方で、[名詞+名詞] の構文環境においてはいずれかの要素が依存概念として機能すると考えられる。例えば、2.3 節の図2では lid がベースとして喚起する抽象的な容器と jar の対応づけによって jarlid の合成構造を示したが、概念的自律性の観点からは、lid (N₂) が依存概念として精緻化サイトを提供し、jar (N₁) が自律概念として精緻化を行うものと捉えられる。また、属性タイプとして示した (6a) の bowleg においては、bow が表す「(弓のように) 湾曲した」という属性が leg を形容詞のように修飾することから、bow (N₁) が依存概念、leg (N₂) が自律概念として作用する。

これらのことから、関係・属性タイプと自律・依存概念の配置法 (A/D-alignment) の対応を表1のように定める。

表1 解釈タイプと A/D-alignment の対応

	N ₁	N ₂	ベースとして喚起される概念構造
属性タイプ	依存概念	自律概念	N ₁ の特徴 (e.g. 色、大きさ、性格)
関係タイプ	自律概念	依存概念	N ₂ に関連する背景知識 (e.g. 意味フレーム)

そして、両タイプの合成構造を図3に示す。図3の点線は各要素の対応関係を示している。左側に図示した属性タイプにおいて、N₁ の灰色部分は名詞から喚起される顕在的特徴 (e.g. 色、大きさ、性格) を示しており、灰色部分を囲む点線の丸は抽象的な事物を指す。N₁ は精緻化サイトを提供し、N₂ の太線の丸に示される事物と対応づけた結果、上部の合成構造 (N₁+N₂) において N₁ の属性が N₂ に帰属することが示される。

右側の関係タイプにおいては、N₂ のボックス内にはプロファイルされる概念に加えて、N₂ が喚起する背景知識 (e.g. 意味フレーム) が示されている。そして、小さい点線の丸により、特定の状況下における参加者を表示している。そして、そのうちの 하나가 N₁ のプロファイルと対応づけられることによって関係タイプの合成構造が示される⁹。

⁹ 厳密に言えば、関係タイプの概念構造は2つの下位タイプをもつ。1つは English teacher のように、N₂

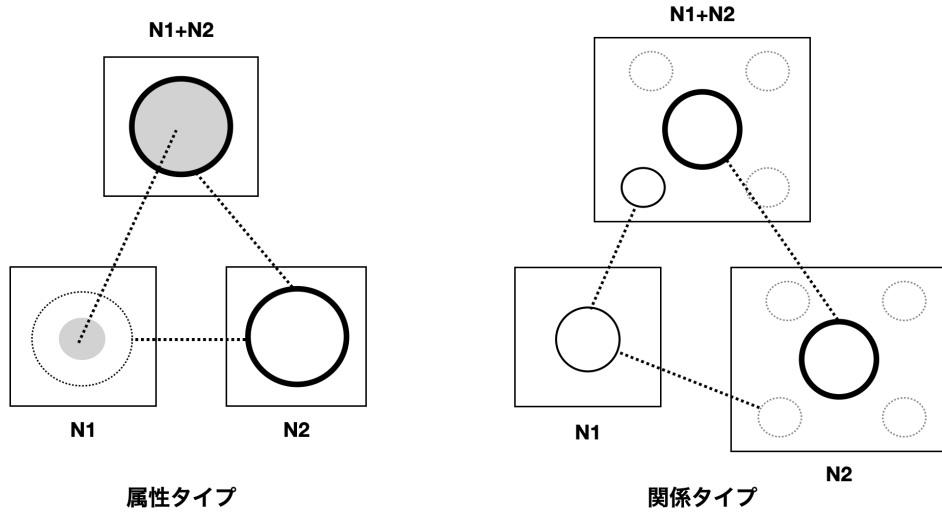


図3 両タイプの合成構造

ここで、具体例として ‘shark lawyer’ の合成構造について考えることとしたい。この組み合わせは典型的に「(サメのように) 狡猾で攻撃的な弁護士」を表すものの、使用場面によっては「サメを法的に保護する弁護士」として解釈されうる (Glucksberg 2001: 28)。前者の解釈においてはコピュラ文へのパラフレーズが可能である (‘the lawyer is a shark’) 一方、後者に関しては言い換えることができない。このことから、前者は属性タイプとして解釈され、後者は関係タイプの解釈を受けるものといえる。

図4において、左側に示した灰色部分は shark の顕在的な特徴である「狡猾・攻撃的」という性格を表しており、主要部の lawyer と合成することによって属性タイプの解釈が導かれる。また、右側の図では lawyer は人物をプロフィールするだけでなく、lawyer が喚起する「保護フレーム」のフレーム役割 (ASSET, PLACE, AGENCY, DANGER) を簡便的に示している。この合成構造においては修飾部の shark が保護対象 (ASSET) として解釈され、全体の合成構造が上部に示される。

本節では複合名詞の主要な意味タイプの違いを確認し、それらを自律・依存概念の配置法の違いとして捉えることによって2通りの概念図式を示した。次節では、図3に示した合成構造のあり方が構文スキーマによって指定されているとい

が事象を (i.e. 教育フレーム) を喚起し、かつそれ自体が特定の役割として生起するものである。もう1つは dinner party のように N_2 が事象全体をプロフィールするものである。

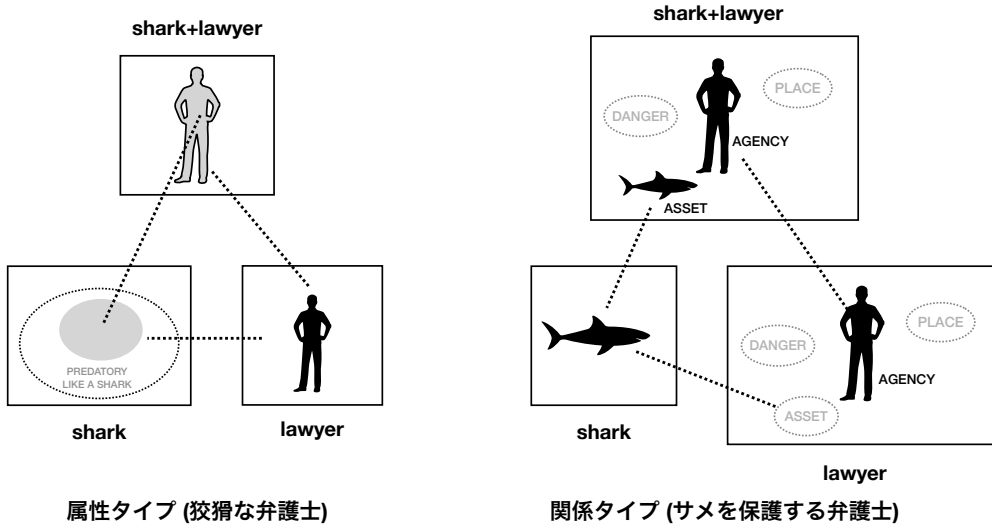


図4 shark lawyer の解釈の2タイプ

う想定のもと、様々なレベルの構文を関係づけていく。

4 複合名詞の構文的知識の階層性

2.3 節において、構文アプローチを採る研究が提示してきた構文スキーマは (i) 最も抽象的なスキーマおよび (ii) 一方の要素を変項とした構文スキーマに大別されることを指摘した。本節では、図3の合成構造を意味内容として含む構文スキーマを提案し、それらが (i-ii) の中間的な抽象度を持つものと位置付けることによって構文的知識の階層性を明らかにする。

4.1 節では各レベルの構文スキーマについて特徴づけを行い、複合名詞の構文ネットワークの全体像を示す。4.2 節では本稿が提案する3つのレベル以外の構文スキーマについて検討する。

4.1 構文の各レベルの指定要素

まず、本稿が提案する構文ネットワークの全体像を図5に図示する。

図5における点線矢印はレベル間の継承関係を表し、各ノードのカッコ <> 内の要素は音韻・統語・意味の順に構成されている。 δ は名詞の音韻構造を示している。数字の添字 $_{1,2}$ は任意の名詞を指し、アルファベットの添字 $_{m,n}$ は特定の名詞

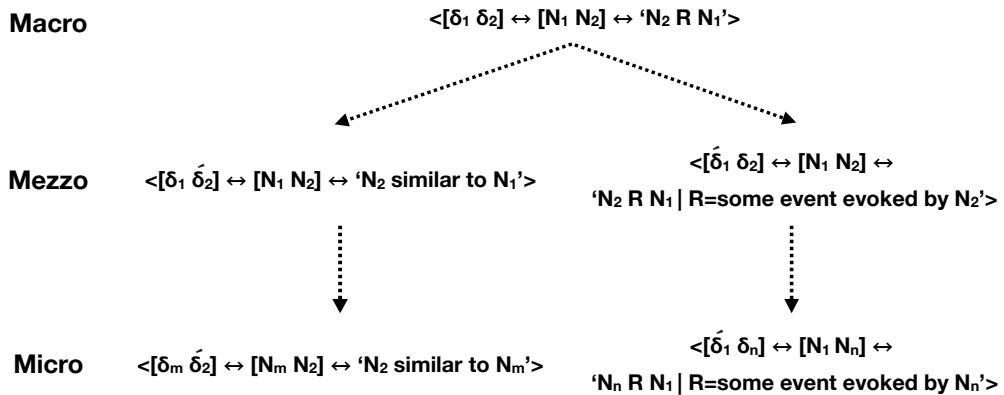


図5 3つのレベルから構成される複合名詞の構文ネットワーク

を表す。なお、図5に記した意味要素は特定の合成構造を簡便的に示したものに過ぎない。

はじめに、ネットワークの最上位(Macro)に位置するマクロ・コンストラクションは、複合名詞の記述において最も抽象度が高い構文に対応する。この構文スキーマは N_2 の意味が主要部として機能することを指定しているため、関係・属性タイプに属する複合名詞はこの構文の下位スキーマとして位置付けられる。また、このような構文的知識を設定した含意として、主要部を一方の要素に持たない並列タイプの複合名詞や名詞の同格用法(apposition)はこのレベルで区別される。

なお、図1に示したLangacker (2008)による一般的なスキーマとは異なり、マクロ・コンストラクションでは強勢や概念の自律性の両方について未指定である点に注意されたい。前者は3.1節で挙げた意味タイプと強勢位置の対応を反映したものである。後者については、Langackerの図式では N_2 が精緻化サイトを持つものと示されているが、このレベルは関係タイプだけではなく N_1 が依存概念としてふるまう属性タイプも包含するため、自律・依存概念の配置法に関しても指定を与えていない。

次に、ネットワークの中位(Mezzo)に位置するメゾ・コンストラクションは2つの変種を持つ。

- (9) a. 属性修飾構文:
 $\delta_1 \delta_2 \leftrightarrow [N_1 N_2] \leftrightarrow 'N_2 \text{ similar to } N_1'$
- b. 関係明示構文:

$$\delta_1 \delta_2 \leftrightarrow [N_1 N_2] \leftrightarrow 'N_2 R N_1 | R = \text{some event evoked by } N_2'$$

このレベルの構文では各タイプに関する概略的な合成構造が示されており、属性タイプを指定する属性修飾構文では N_2 が強勢を持ち、関係タイプに対応する関係明示構文において N_1 が強勢を持つことが指定されている。複合名詞の使用においては、一方の名詞を変項とした構文イディオムのみでは予測できないような新規の組み合わせを理解する場合、または新奇の解釈を与える際にメゾ・コンストラクションが特に活性化するものと考えられる。

そして、下位の階層 (Micro) にあるマイクロ・コンストラクションでは一方の構成要素の情報が特定の名詞によって指定されており、これは構文イディオムに相当する。属性タイプの解釈に用いられる属性の手がかり、関係タイプの理解に欠かせない精緻化サイトについての具体的な百科事典的知識 (e.g. 意味フレーム) のあり方や、形式に関しても一方の名詞の具体的な音韻形式が与えられているため、構文ネットワークの中では具体性が高い構文として位置付けられる。

4.2 他のレベルの検討

前節ではメゾ・コンストラクションを導入することで3つのレベルから成る複合名詞の階層的知識を示した。メゾ・コンストラクションの導入によって構文ネットワークの継承関係がより明確となり、新規の組み合わせの使用で参照されるスキーマに予測を与えた点で一定の意義があると思われるが、これは他のレベルを設定する可能性を排除するものではない。

一つは、メゾ・コンストラクションとマイクロ・コンストラクションの中間位置に属する構文スキーマである。例えば、Levin et al. (2019) では名詞+人工物 (artifact) の組み合わせ (e.g. fish spatula, wedding cake) が「 N_2 に生起する人工物の機能的側面を N_1 が指定する」という予測を与えており、コーパス調査とオフライン実験からその妥当性を実証した。このような知識を構文スキーマとして表示する場合、関係明示構文と形式的な指定は同一であるものの、 N_2 の意味が人工物であることを指定している点で具体性が高い。

もう一つは、意味・形式が共に完全な指定を受けている事例単体から成る構文であり、これはマイクロ・コンストラクションの下位スキーマとして位置付けられる。

[X+board] という構文イディオムは形式的にみて多くの下位事例 (spring board, keyboard, cupboard, ...) を持つ。見かけ上は生産度が高いパターンであるが、事例間の意味的な共通性が低いため、構文イディオムの意味内容が抽象的にならざるを

得ないという問題がある (cf. 早瀬 2020)。近 (2022) ではこのような問題に対して、[X+board] や [X+garden] (beer garden, rabbit garden, rose garden, ...) といったパタンの使用に際して構文イディオムの貢献は少なく、新規事例の使用には構文イディオムの具現化・カテゴリー化よりも特定事例との類推 (analogy) が多分に影響している可能性を指摘した。そのため、[X+board] や [X+garden] の事例は、マイクロ・コンストラクションよりもさらに具体性の高い構文ユニットとして定着しているものと考えられる。

5 おわりに

本稿では複合名詞の妥当な意味記述をめぐる、言語知識の基本単位として構文スキーマを重要視する構文アプローチの枠組みを検討した。まとめとして、主な主張を以下に列挙する。

- (10) a. 構文アプローチは複合名詞の非構成的な意味に対して粒度と予測性の両面を捉えた記述を可能にする。[2 節]
- b. 構文アプローチには (i) 構文に記載される意味内容 (ii) 構文の階層的知識について検討課題が残る。[2 節]
- c. 意味タイプ (属性タイプ・関係タイプ) の違いを捉えるには、構成要素の概念的自律性のあり方を区別する必要がある。[3 節]
- d. 複合名詞の構文スキーマは抽象度合いが異なる3つのレベルに分類でき、それらが継承関係によって関係づけられる。[4 節]cc

最後に、メゾ・コンストラクションにおける強勢の指定が経験的に妥当なのか、そして、マクロ・メゾ・マイクロの3レベル以外の構文スキーマを言語的知識として積極的に認定すべきかといった問題が未検討となっている。これらの議論は別稿に譲ることとしたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 (研究課題番号: 21J13681) の助成を受けたものである。

参考文献

Adams, Valerie. 1973. *An Introduction to Modern English Word-formation* Longman. London: Harlow.

- Bauer, Laurie, Rochelle Lieber, and Ingo Plag. 2015. *The Oxford reference guide to English morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Benczes, Réka. 2006. *Creative compounding in English: The Semantics of Metaphorical and Metonymical Noun-Noun Combinations*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Bezuidenhout, Anne. 2019. Noun-Noun Compounds from the perspective of Relevance Theory. In Kate, Scott, Clark Billy, and Carston Robyn (eds.), *Relevance, Pragmatics and Interpretation*. 174–186. Cambridge: Cambridge University Press.
- Booij, Geert. 2010. *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.
- Bundgaard, Peer F, Svend Ostergaard, and Frederik Stjernfelt. 2006. Waterproof fire stations? Conceptual schemata and cognitive operations involved in compound constructions. *Semiotica* 161: 363–393.
- 近大志. 2022. 「NN 構文における意味の変異について—[N garden] 問題から」『日本認知言語学会発表論文集』22: 187–191.
- Cinque, Guglielmo. 1993. A null theory of phrase and compound stress. *Linguistic inquiry* 24(2): 239–297.
- Downing, Pamela. 1977. On the creation and use of English compound nouns. *Language* 53(4): 810–842.
- Fillmore, Charles J. and Collin F. Baker. 2015. A frames approach to semantic analysis. In Hein, Bernd and Heiko Narrog (eds.), *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*. 791–816. Oxford: Oxford University Press.
- Gagné, Christina L and Thomas L Spalding. 2013. Conceptual composition: The role of relational competition in the comprehension of modifier-noun phrases and noun-noun compounds. *Psychology of learning and motivation* 59: 97–130.
- Giegerich, Heinz J. 2004. Compound or phrase? English noun-plus-noun constructions and the stress criterion. *English Language and Linguistics* 8(1): 1–24.
- Glucksberg, Sam. 2001. *Understanding Figurative Language: From Metaphor to Idioms*. Oxford: Oxford University Press.
- Hamlitsch, Nathan Jesse. 2020. 「日本語借用拘束形態素に関する認知言語学的研究—フレーム意味論および構文形態論の観点から—」博士論文, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻.
- 早瀬尚子. 2020. 「II 部 構文文法」坪井栄治郎・早瀬尚子 (編) 『認知言語学 (1) 認知文法と構文文法』122–254. 東京: 開拓社.
- Jespersen, Otto. 1942. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Vol VI*. London: Allen&Unwin.

- 影山太郎. 1997. 「2章形態論とレキシコン」西光義弘(編)『日英語対照による英語学概論増補版』47–95. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎. 1999. 『形態論と意味』東京: くろしお出版.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar. Vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford, CA: Stanford university press.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Levi, Judith N. 1978. *The Syntax and Semantics of Complex Nominals*. New York: Academic Press.
- Levin, Beth, Lelia Glass, and Dan Jurafsky. 2019. Systematicity in the semantics of noun compounds: The role of artifacts vs. natural kinds. *Linguistics* 57(3): 429–471.
- Lieber, Rochelle. 2009. *Introducing Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Plag, Ingo, Gero Kunter, Sabine Lappe, and Maria Braun. 2008. The role of semantics, argument structure, and lexicalization in compound stress assignment in English. *Language* 84(4): 760–794.
- Ryder, Mary E. 1994. *Ordered Chaos: The Interpretation of English Noun-Noun Compounds*. California: University of California Press.
- Warren, Beatrice. 1978. *Semantic Patterns of Noun-Noun Compounds*. Lund: Goteborg Acta Universitatis Gothenburgensis.
- Wisniewski, Edward J. 1997. When concepts cobine. *Psychonomic Bulletin & Review* 4: 167–183.
- Wisniewski, Edward J and Dedre Gentner. 1991. On the combinatorial semantics of noun pairs: Minor and major adjustments to meaning. *Advances in psychology* 77: 241–284.
- Zlatev, Jordan, Viktor Smith, Joost van de Weijer, and Kristina Skydsgaard. 2010. Noun–noun compounds for fictive food products: Experimenting in the borderzone of semantics and pragmatics. *Journal of Pragmatics* 42(10): 2799–2813.

A Critical Review of Constructional Approach to Nominal Compounds

Taishi Chika

Nominal Compounds (Noun+Noun) contain meanings not totally reduced to each constituent's concept (e.g. rice wine 'wine *made from* rice' sneaker war '*commercial competition* over sneaker'). In addition to the role of contextual inference (Downing 1977, Jespersen 1942), in recent years, frequency is also considered to be a significant factor in the successful interpretation of non-compositional meanings (Hamlitsch 2020, Levin et al. 2019, Zlatev et al. 2010). In search of an appropriate descriptive framework, this paper offers a critical review of the constructional approach based on the Usage-Based Model (Langacker 1987, 2008, Ryder 1994) and Construction Morphology (Booij 2010). While this approach has the advantage of providing descriptive granularity and meaning predictability over other theories (e.g. Levi 1978, Warren 1978), there remain two questions concerning constructional schemas: one is the aspects of the encyclopedic knowledge evoked by constituents, and the other is the hierarchical structure represented in the constructional network.